東日本大震災被災地を訪ねて

現地視察 10 年の感想

2011 年～2021 年

気仙沼向洋高校　2011 年 4 月

南三陸町防災庁舎　2011 年 4 月

仮埋葬地 石巻市上釜ふれあい広場 2011 年 4 月

鵜住居小跡（左は釜石東中）2012 年 4 月

浪江町請戸小学校　2016 年 4 月

鵜住居小跡地にラグビー場建設 2018 年 4 月

災害対策研究会

はじめに

最初の被災地視察は震災から約１か月後の２０１１年４月でした。岩手県久慈市から宮城県亘理町まで、通行できない個所がおおく、宿泊場所や食堂などもない中での視察でした。その後も多くの方の協力を得ながら、この 10 年間ほとんど毎年１週間から１０日程度の日程で青森県八戸市から千葉県旭市までを視察しました。福島県では今でもまだ住民の方が帰還できない区域が残っていますが、東日本大震災被災地沿岸部の全市町村を見て回ることができました。

阪神・淡路大震災と比べて、津波被害の大きさや原発事故の影響で、復旧までの時間がはるかに長くかかり、復旧の姿もこれで良いのかとの疑問が残るところもありますが、東日本大震災から１０年を区切りに、被災地視察のまとめと感想を記述しました。なお、被災地の写真については、災害対策研究会のホームページに市町村別に掲載していますのでそちらもぜひご覧ください。

この資料は東日本大震災の被災地視察を検討されている方や、被災市町村の復旧過程を知りたい方、そして、今世紀前半に発生すると思われる南海トラフ地震に対して地域の備え方を検討する際の参考にしていただければ幸いです。

２０２２年１月
災害対策研究会代表　宮本英治

災害対策研究会ホームページ
https://www.saitaiken.com/

東日本大震災被災地を訪ねて
現地視察 10 年の感想

第 1 版発行：2022 年 1 月
視察・執筆：宮本英治
企画・編集：釜石　徹

目　次

＜岩手県＞

洋野町・・・・・P.1
久慈市・・・・・P.2
野田村・・・・・P.4
普代村・・・・・P.5
田野畑村・・・・P.6
岩泉町・・・・・P.7
宮古市・田老・・P.8
宮古市・・・・・P.9
山田町・・・・・P.11
大槌町・・・・・P.13
釜石市・・・・・P.15
大船渡市・・・・P.17
陸前高田市・・・P.19

＜宮城県＞

気仙沼市・・・・P.21
南三陸町・・・・P.23
石巻市北部・・・P.25
女川町・・・・・P.27
石巻市・・・・・P.28
東松島市・・・・P.30
塩釜市・・・・・P.32
多賀城市・・・・P.33
七ヶ浜町・・・・P.34
仙台市・・・・・P.35
名取市・・・・・P.37
岩沼市・・・・・P.39
亘理町・・・・・P.40
山元町・・・・・P.41

＜福島県＞

新地町・・・・・P.43
相馬市・・・・・P.44
南相馬市・・・・P.45
浪江町・・・・・P.47
双葉町・・・・・P.49
大熊町・・・・・P.50
富岡町・・・・・P.52
楢葉町・・・・・P.54
広野町・・・・・P.56
いわき市・・・・P.57

※途中ページから先頭ページに戻るとき：[Home]、Shift＋Ctrl＋（[PageUp]または[↑]）

【洋野町】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	約１５ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		０人（関連死０人）
人口推移	２０１０年	１７，９１３人
	２０２０年	１４，８７４人
	増減率	―１７％
主要地域	川尻、種市、八木	

〇被害と復旧状況

・全体

・町は内陸にも広がっているが、主要地域はＪＲ八戸線に沿った沿岸部にある。沿岸は海岸段丘が続き、住宅や公共施設は高台にあって津波被害は漁港とその付近の低地部に限られる。

・多くの漁港すべてが被害にあったが早期に復旧した。

・ＪＲ八戸線は一部に被害を受けたが早期に復旧（２０１２年３月）。

・川尻地区

・川尻地区の防潮堤（標高１２ｍ、２０００年完成）は先見の明で津波（津波高約１０ｍ）の被害を漁港のみに抑えた。

・種市地区

・漁港やウニの養殖施設が被害を受けたが、早期に復旧した。

・洋野水産会館「ウニーク」ができたが、観光ルートからは離れており、苦戦しそう。

・八木地区

・八木港の背後に大きな防潮堤が完成したが、ＪＲ八戸線はその海側にあり、防潮堤の効果は限定的。

〇１０年間の視察結果と感想

・住宅や公共施設（役場、病院、学校など）は高台にあり、津波対策上の問題は少ない。

・人的被害が小さいと復旧は早い。

・しかし、人口減少率が大きく、少子高齢化は今後も続くと思われる。

・内陸の大野地区（小中高校がある）も含めて、長期的には人口１万人強で継続できるまちづくり計画が必要。内陸の大野地区と沿岸の種市地区の２拠点（コンパクトな中心地）とサテライト構想であろう。

・八木では数件の住宅等の高台移転を行なえば防潮堤は不要と思われる。

【久慈市】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	約１５～２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		６人（関連死１人）
人口推移	２０１０年	３６，８７２人
	２０２０年	３３，０２３人
	増減率	―１０％
主要地域	国家石油備蓄基地、湊町、中心部、小袖～久喜	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・被害は国家石油備蓄基地付近と久慈港付近で、市の中心部に津波は到達していない。

・湾口防波堤の計画があるが完成は２０２８年予定。

・市内の津波対策は湾口防波堤を前提としていると思われる。

・国家石油備蓄基地・北日本造船

・敷地標高はＴＰ３ｍ、防潮堤が無く、陸上部分は大きな被害。

・ただし、この地域に人は住んでいない。

・復旧を果たした現在も防潮堤はない。

・湊町

・津波が多少堤防を越えたが、住民は金毘羅神社に避難し無事。

・沿岸の防潮壁や河川堤防を嵩上げた（海抜４ｍ→６ｍへ約２ｍの嵩上げが行われたと思われる）。

・津波避難先の総合福祉センターは遠い（約１ｋｍ）ため、住宅地に津波避難タワーが設置された。

・湊小も津波が久慈川堤防を越え浸水したが、継続使用している。

・湊小の津波避難先も総合福祉センターで遠いので、その手前の個人宅の庭が避難場所として指定されている（なお、その個人宅は通行人が見つけることは難しい）。

・中心部

・港湾部に被害があったが、早期に復旧。

・長内小が多少浸水したが、継続使用している。

・中心部に津波は到達しておらず、人口密集地域の被害はない。

・小袖～久喜

・漁港は被害を受けたが、小袖の住宅や保育園、小中学校は高台にあって住宅被害や死者は少ない。

・水産業は早く復旧したので、震災前・後に大きな変化はない

・小袖は湾口防波堤外で大きな防潮堤が設置されたが、景観を損なうので不要と思われる。

○１０年間の視察結果と感想

・久慈市の人口は３万人を超えており、津波被害も大きくはないため、将来の湾口防波堤を見込んだ防潮堤の嵩上げ以外の大規模な現状改変は行われないと思われる。

・国家石油備蓄基地付近に最低限の防潮堤は必要。

・湊小、長内小は浸水域外に移転すべき。

・小袖～久喜には高台に住宅、保育園や小中学校はあるが、出張所・診療所・店舗は無くコンパクトな拠点づくりが必要と思われる。

【野田村】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	お台場公園斜面で約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		３９人（関連死１人）
人口推移	２０１０年	４，６３４人
	２０２０年	３，８８７人
	増減率	―１６％
主要地域	野田漁港～十府ヶ浦、中心部、玉川、下安家	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・被害は町役場～沿岸部に集中している。

・野田漁港～十府ヶ浦

・漁港は大きな被害を受けたが復旧した。

・津波で旧１線堤が壊滅し、旧２線堤と三鉄盛土を越えて沿岸に近い地域に大きな被害を与えたが、町役場付近の被害を軽微に抑えた。

・今は野田漁港～十府ヶ浦の沿岸部を巨大な防潮堤で守っている。

・国道からも三鉄からも十府ヶ浦の景観は見えない。

・観光面ではデメリットである

・１線提～防潮林～三鉄・国道４５号～公園は過大投資と思われる。

・費用対効果やメンテナンス費用の面で。

・中心部

・内陸（新町）に７０世帯の防集ができ、保育所は津波浸水域から域外へ移転した。

・玉川

・漁港は被害を受けたが、住宅や特養、保育所などは海岸段丘上にあって無被害。

・下安家

・さけ孵化場が壊滅的な被害を受けたが、早期に復旧した。

〇１０年間の視察結果と感想

・既存の２線堤と三鉄の盛土が津波被害を軽減した。

・高い防潮堤は功罪あり（景観を失った）

・野田漁港付近の巨大な陸閘や防潮堤は過大投資でしょう。メンテも大変である。

・野田村の未来に向けたまちづくりとは下記であろう。

・産業は水産業（野田漁港は大きい）と農業と思われる。

・国道４５号沿いに商業施設（コメリ、薬王堂、スーパー越戸）・・実は久慈市だが野田村に近い。

・内科、歯科医院がある。

・小中学校があり、保育所も野田村保育所（高台移転）など３ヶ所。

・生活基盤はそろっているが、散らばっている。

・長期的には人口３千人強で継続できるコンパクトな村づくり。

【普代村】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		１人（関連死０人）
人口推移	２０１０年	３，０８８人
	２０２０年	２，５０５人
	増減率	―１９％
主要地域	中心部、太田名部	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・高さ１５．５ｍの普代大水門と太田名部防潮堤で守り切った。

・中心部

・普代大水門は津波高２０ｍの津波が超えたが、集落までは遡上せず
海に最も近い位置の小学校手前で止まった。

・三鉄の普代駅付近に三陸道ＩＣができた。

・太田名部地区

・太田名部では津波は１２ｍで防潮堤を越えず、住宅に被害はない。
※ただし、太田名部の住民は過信せずに津波避難していた。

・防潮堤より海側は大きな被害を受けたが、漁港・水産加工施設は復旧している。

・太田名部の防潮堤は現在、数億の予算で耐震強化の工事中。

〇１０年間の視察結果と感想

・巨大水門や防潮堤で守り切ることもできる。

・小中学校は最も海側にある（建て替え時には内陸側へ移すべき）。

・子供園や診療所（医科・歯科）・商店（スーパー越戸）等がある。

・長期的には人口２千人強の継続できる村づくり。

・コンパクトな中心地とサテライト（堀内と太田名部）

【田野畑村】

津波	浸水高	約２０ｍ
	遡上高	約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		３２人（関連死３人）
人口推移	２０１０年	３，８４３人
	２０２０年	３，０２９人
	増減率	―２１％
主要地域	内陸中心部、沿岸部（机浜、羅賀、平井賀、島越、牛切）	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・田野畑村は、町役場や小中学校などの公共施設が集まる内陸部（酪農）と沿岸部（漁業）がある。津波被害は沿岸部。

・内陸中心部

・内陸部に村役場がある。その付近に小中学校・保育園、診療所、歯科クリニック、社会福祉施設、商店がそろっており、道の駅が新装された。

・内陸部は酪農が盛んと思われる。

・沿岸部

・漁港や住宅の被害は沿岸部の羅賀、平井賀、島越などである。

・平井賀や島越でも高台にある住宅は被害を受けていない。

・漁港は大きな被害を受けたが復旧している（島越の防潮堤はまだ工事中）。

・三鉄北リアス線の最大の被害は島越駅付近と思われる（２０１４年４月に全線復旧）。

・沿岸部の産業は水産業と観光（ホテル羅賀荘、ざっぱ船）である。

・クルーズ船や三鉄島越駅の「島越ふれあい公園」など、観光を意識したものとなっているが、観光にどこまで期待できるかは不明。

・沿岸部で被害を受けた住宅は防集（黎明台）に集まっているが、黎明台には郵便局はあるが、保育園や商店などはない。

〇１０年間の視察結果と感想

・島越の防潮堤や、三鉄島越駅裏の嵩上げは不要と思われる（住宅は黎明台に移転した）。

・内陸（村役場付近）にコンパクトな中心地、沿岸（黎明台）にサテライト的拠点であろう。

・黎明台に、せめて保育園と商店が欲しい。

【岩泉町】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	茂師で約２５ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		１０人（関連死３人）
人口推移	２０１０年	岩泉町全体で１０，８０４人
	２０２０年	８，６４１人
	増減率	―２０％
主要地域	小本、茂師	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・岩泉町の中心部は小本川上流１５ｋｍにあり、その中間には洪水で死者を出した高齢者施設「らんらん」がある。

・小本の被害は国道４５号より海側、約１ｋｍ四方である。

・そこに、小中学校があるが津波避難に成功している。

・小本

・津波被害が大きいのは小本港と小本川河口部周辺。

・小中学校とも河口に近く、被害にあったが避難で犠牲者はいない。

・防潮堤の嵩上げは一部地域（小本地区）のみ。

・三鉄小本駅に防災センターが併設され、出張所、診療所（ただし、診療日は月に２日のみ）がある。

・駅の近く（海側）に商店（スーパーやコンビニ）もある。

・小中学校は三鉄や三陸道よりも内陸側に移設（但し、小本川沿いで河川氾濫の心配がある）。

・住宅も駅付近に集まりそう。

・小本地区の産業は漁業と、小本川沿いの農業と思われる。

・浜の駅「おもと愛土館」は観光ルートではないので苦戦しそう。

・茂師

・宮古市田老との境界付近にあり、漁港は復旧している

・住宅は高台移転済みで被害は軽微で好事例だが、保育所等はなく、先々どうなるかは不透明。

〇１０年間の視察結果と感想

・小本地区の人口は少ない。小本駅付近のコンパクトなまちづくりを徹底すべき（愛土館も移転すべき）。

【宮古市田老地区】

津波	浸水高	約１５ｍ
	遡上高	小堀内漁港で約４０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		約１８５人
人口推移	２０１０年	田老地区で約４，４００人
	２０２０年	３，０００人以下
	増減率	―３０%以上
主要地域	摂待～グリーンピア、田老	

〇被害状況と復旧状況

・摂待～グリーンピア

・摂待は漁港に被害を受けたが、住宅は内陸にあって被害軽微。

・田老第３小は津波被害を受けていないが、２０１９年３月に閉校となった。

・グリーンピア三陸みやこは内陸高台にあり無被害。広大な敷地に４００棟の仮設住宅が建設され、仮設店舗、臨時の診療所・薬局などが開設された。現在は全て閉鎖された。

・グリーンピアに南の小堀内漁港で津波が３８ｍまで遡上し、海抜２０ｍ付近で見張っていた消防団員６名が亡くなった。

・田老

・死者・行方不明者は約１８５名、万里の長城と形容させた防潮堤は敗北したように言われているが、そうではない。

・明治、昭和、平成の死者数・死者率を比較すべき（激減している）。

・死者１８５名の原因を究明すべき（気象庁の津波警報、津波到達情報の影響など）。

・田老漁港・魚市場はほぼ復旧

・巨大な防潮堤と住宅などの高台移転→人口の大幅な減少

・乙部の高台（三王団地）に２８５戸、保育所や診療所もある。

・田老第一中学校前の住宅建設は進んでいない。

・防潮堤の作り替えで守るものは？内側に住宅はほとんどない。

・４５号沿いの内陸高台でのまちづくりを選択すべきだったと思われる。

〇１０年間の視察結果と感想

・防潮堤（万里の長城）が敗北の原因ではない。

・防潮堤～産業（水産業、商業）用地・緑地帯～狭い嵩上げ地では中心地に住民は戻らない（人口減少は続きそう）。

・４５号沿いの内陸側でのコンパクトなまちづくりを選択すべきだったと思われる。

・自然豊かで安全な町

・例えば、グリーンピアは宮古市の所有で、乙部の高台（三王団地）よりも広い。または宮古カントリークラブを買い取った方が、費用も安く、工事期間もかなり短縮できたと思われる。

【宮古市（田老地区を除く）】

津波	浸水高	中心部で約８ｍ
	遡上高	重茂半島で約４０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		５６９人（関連死５５人）
人口推移	２０１０年	５９，４３０人
	２０２０年	５１，１９７人
	増減率	－１４％
主要地域	鍬ケ崎、中心部、津軽石、重茂半島	

※死者行方不明者、人口は田老地区を含む宮古市全体

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波被害は、田老、宮古港沿岸部（鍬ケ崎や磯鶏など）、津軽石、重茂半島の漁港付近である。

・鍬ケ崎～宮古市中心部

・鍬ケ崎など沿岸部の被害は大きい。

・閉伊川河口に巨大な防潮水門を工事中（２０２７年完成予定）。

・巨大な防潮堤は鍬ケ崎～閉伊川河口水門～津軽石まで延々と続く。

・鍬ケ崎は水産業、商業地、住宅地に区分けされているが、住宅地は狭く、佐原団地など内陸側に移転したと思われる。

・新・市役所は浸水範囲外に移転。駅にも近く、新・市街地（イーストピア）の中心となりそう。

・旧市街地は歯抜け状態、防潮堤も古いまま（閉伊川河口に防潮水門を建設中で内側の防潮堤は嵩上げ不要か）。

・宮古港（閉伊川の南側）

・室蘭へのフェリーが休止している（早期再開が期待される）。

・津軽石

・津軽川河口水門は嵩上げた（ＴＰ８．５m→１０．４m）。

・県立運動公園が復旧し、農地も再開している。

・重茂

・漁港と漁港付近の住宅は大きな被害を受けた。

・姉吉の石碑（ここより下に家をたてるな）が有名。

・小中学校、支所、診療所、漁協、水産加工施設や多くの住宅が内陸高台にあって被害を受けていない。

〇１０年間の視察結果と感想

・北部

・田老は漁港、水産加工施設、道の駅、球場が目立つ。住宅を内陸へ移せば高い防潮堤で囲む必要はない。

・北部の中心地として、津波浸水域外にコンパクトなまちづくりを目指すべき。
・震災メモリアルパーク中の浜の意義が不明。おそらく訪問者も極めて少ないと思われる。

・中心部
・おそらく鍬ケ崎に住宅はほとんど戻らない。閉伊川河口水門と防潮堤で宮古市中心部を守る必要であろうが、鍬ケ崎などは住宅を高台へ移せば巨大な防潮堤は不要。必要最小限とすべき。
・市役所が浸水域外に移転し、新たな中心市街地ができそう。

・重茂半島
・重茂は現在も、小中学校、診療所、漁協等が内陸高台にある。ここを中心として継続可能なまちづくりを目指すのが良さそう

・全体
・内陸部や沿岸部に分散していることも宮古市の課題である。
・田老・重茂などを含めた人口５万人の、継続するまちづくり計画が必要と思われる。

【山田町】

津波	浸水高	約８～１０ｍ
	遡上高	船越で約１５ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		８３２人（関連死８３人）
人口推移	２０１０年	１８，６１７人
	２０２０年	１４，４４３人
	増減率	－２２％
主要地域	豊間根、大沢、北部、中心部、織笠～船越～田之浜	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波被害は大沢、中心部の北部、中心部のほぼ全域と、織笠～船越～田之浜の沿岸部である。

・豊間根

・内陸で被害はない。

・福祉施設「親和会望みの園はまなす（元は船越のシーサイドカロに併設されていた）」や商業施設「びはん」の支店ができた。

・小学校・保育所はあるが中学校が閉校（２０２０年）。

・大沢地区

・沿岸部は壊滅的な被害。

・防潮堤や漁港が完成。

・復興公営住宅と商業施設が４５号沿いにできた。

・保育園はあるが高台の大沢小学校の廃校は残念、小学校付近には防集もある。

・中心部・北部

・ほぼ全地域が壊滅的被害で、旧・山田病院は１階が浸水して孤立したが、停電・断水の中で診療を継続した。その後は運動公園での仮設診療所を経て、現在は高台へ移転。旧・山田病院は解体された。

・嵩上げ地に災害公営住宅が２ヵ所できた。

・商業施設（コメリやキクコー（スーパー））ができた。

・中心部

・山田湾に沿って中心部があり、壊滅的な被害。やや高台にある町役場は浸水範囲外で無事。

・高い防潮堤が完成、大規模な漁港・水産加工施設が復旧。

・大型店舗「びはん」が完成。

・三陸鉄道（旧・ＪＲ山田線）の山田駅が復旧した。

・駅付近に住宅も戻り始めているがまだまだ。

・小学校６校（大沢、山田北、山田南、織笠、轟木、大浦）を統合し山田小とした。ほかには豊間根小、船越小。

・高台に統合した中学校や、新・山田病院、その近くの高台に戸建て

の復興住宅（第１団地７ｈａ）がある。

・織笠～船越～田之浜

・織笠は高台の織笠小学校や保育園を除いて壊滅的な被害、織笠駅も消滅し移転。

・新・織笠駅の近傍に防集と復興公営住宅。

・船越では住宅は浸水範囲外にあり、被害が小さい。

・対岸の浦の浜の低地の介護施設「シーサイドかろ」で入所者・職員合わせて８８名が避難の遅れで亡くなった。現在は内陸側や高台に移転している。

・船越小学校は嵩上げして復旧。

・田之浜は高台の住宅地域を除き、漁港とその付近の住宅は壊滅的な被害。高台の住宅地域は無被害。

・田之浜漁港は復旧した。

・田之浜の防集は小規模で数カ所に点在している。

〇１０年間の視察結果と感想

・町の中心地区では漁港の外側に高い防潮堤を設け、国道４５号よりも内側を嵩上げて商業施設や復興公営住宅を置き、医療機関や介護施設や住宅（防集）は高台に建設している。

・サテライトは豊間根、大沢、船越～田之浜。

・時間がかかったが、全体の方向性は見えてきた。

・人口１万４千人のまちづくりが進んでいると思われるが、内陸の豊間根を拠点（中心地）とする方法もあった。

【大槌町】

津波	浸水高	約１０～１７m
	遡上高	浪板で約２０m
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１，２７２人（関連死５２人）
人口推移	２０１０年	１５，２７６人
	２０２０年	１０，７８６人
	増減率	－２９％
主要地域	浪板、吉里吉里、中心部（大槌・町方・小鎚）、安渡、赤浜	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・町のほぼ全域が浸水範囲。

・死者率は全住民の約８％で陸前高田市とほぼ同じ。

・浪板

・沿岸部に大きな被害。

・旧・ＪＲ山田線より北の高台（「風の電話」がある）の住宅は被害なし。

・沿岸の三陸花ホテルはまぎく（元・浪板観光ホテル）が再開（２０１３）。

・吉里吉里

・低地部に大きな被害。

・小学校、中学校は高台にあって被害なし。

・４５号～小学校周辺を嵩上げて住宅を建設。

・保育園やクリニックもある。

・中心部（大槌、町方、小鎚）

・大槌川、小鎚川の上流側を除いて、ほぼ全域が津波に襲われた。

・大槌地区では被災した大槌中学校が遺体安置所となった。

・小鎚地区では浸水はしたものの、桜木町など住宅は残っている。

・中心部（町方：まちかた）は壊滅的被害で、町役場では町長を含む４０名の職員が亡くなった。大槌病院町も被災した。

・町役場は元・大槌小学校を修復して再開。

・小学校４校（大槌、大槌北、安渡、赤浜）と大槌中学校を統合し、大槌学園を設立（残るは吉里吉里学園（小中併設））。

・巨大な防潮堤と大槌川、小鎚川の河口に巨大な水門。

・サケ孵化場も稼働している。

・三鉄（旧・山田線）・大槌駅付近は、嵩上げ工事や旧・山田線の復旧に時間を要したため、住民は転居済みで活気を取り戻せるのか不安である。

・防集や災害公営住宅は、中学校跡、大ヶ口、大槌学園横、桜木町、病院近隣など。

・小鎚川に近い「おおつちこども園」は移転が望ましい。

・大規模商業施設「マスト」は１階が浸水したが、早期に再開した。

・安渡
　・ほぼ全域が津波に襲われた。
　・大槌漁港は大規模工事がほぼ完了している。
　・高台の防集も完成している。
　・安渡小学校は浸水を免れたが閉校して大槌学園に統合。跡地は地域に活用されている。
・赤浜
　・高台を除き、ほぼ全域が津波に襲われた。
　・赤浜の防潮堤の高さは震災前とほぼ同じ（１m程度の嵩上げ）で、住宅は高台（嵩上げ地）へ。
　・嵩上げ地には東京大学国際沿岸海洋研究センターが移設された。
　・赤浜小も大槌学園に統合。跡地は嵩上げて住宅地に。

〇１０年間の視察結果と感想
・時間を掛けての「防潮堤～産業用地・緑地帯～嵩上げ地」では住民は戻らなくなる。
・人口約１万人の、継続できるまちづくり（コンパクトなまちづくり）を計画すべき。現状は駅、町役場、学校、病院、商業施設、住宅などが分散している。

【釜石市】

津波	浸水高	約１０～２０m
	遡上高	両石で約３０m
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１，１４６人（関連死１０６人）
人口推移	２０１０年	３９，５７４人
	２０２０年	３３，３３７人
	増減率	－１６%
主要地域	鵜住居地区、両石、中心部、平田、唐丹地区	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・被害範囲は沿岸部のほぼ全域であるが、その中でも鵜住居地区の死者数が最も多い。

・鵜住居地区

・津波は１０m～１５mを超える。

・直接死は鵜住居だけで約６００名で釜石全体の半数を超え、死亡率は１２%である。

・片岸では三鉄リアス線東側が産業用地・親水公園、西側が商業、住宅の予定と思われるが、空き地も多い。

・鵜住居では鵜住居川の河口水門が完成、津波に対する守り方は地域によって違いがある。

・鵜住居（高い防潮堤、小中学校等の高台移転、住宅地嵩上げ）

・根浜（低い防潮堤、住宅は高台移転）

・箱崎（高い防潮堤、住宅は高台移転）

・住宅は駅を中心に７００戸建設予定だが、未だ空き地も多い。

・小中学校、幼稚園、スーパー、歯科、内科がそろったが、現在の人口は（片岸、両石、箱崎を含め）約３，５００人。

・日向地区には既存の県営や民間のＲＣ建物が８棟あり、総戸数は２００戸を超えると思われる。これが嵩上げ地の住宅建設のブレーキとなっているように思われる。

・両石

・最大遡上高は２８m。

・対策方法（高い防潮堤と地域全体の大規模な嵩上げ）の是非、高い防潮堤は不要と思われる。

・釜石中心部

・大水深湾口防波堤のおかげで、浸水範囲は釜石駅より東側で、浸水深は沿岸部で約１０m。それより内側の商店街は１階が壊滅的な被害。

・釜石港も大きな被害を出したが、震災４日後には支援物資の陸揚げを

行っている。

・新日鐵釜石（当時）も工場の海側半分が浸水。浸水しなかった施設は行政にも提供した。

・復旧が進み、漁港・魚市場・魚河岸テラスやホテル、市民センター等が整備され、グレーンセンター奥側に大規模商業施設（イオン）が進出。

・大規模商業施設（イオン）は釜石駅近くのマイヤやケーズデンキなどの既存店舗への影響が心配である。

・一方で中心街には古い飲食店もあり、コンビニも閉店したところがある。

・平田

・大水深湾口防波堤の中側にあって津波高は約１０ｍ。しかし、沿岸部は壊滅的な被害。

・県営の災害公営住宅（旧・釜石商業高校）は規模が大きい。

・唐丹地区

・大水深湾口防波堤の外にあり、唐丹、小白浜、本郷、花露辺などの津波高は約２０ｍ。

・片岸川をわたる旧・山田線の鉄橋は流されたが早期に復旧した。

・小白浜は高い防潮堤と嵩上げの両方が行なわれ、唐丹小中学校と児童館などを集めたコンパクトシティ化に近いが、中学校は閉校となった。

・花露辺は防潮堤の無い漁村で、被災した住宅は高台移転した。ただし商店や保育園は無い。

〇１０年間の視察結果と感想

・大水深湾口防波堤（釜石、大船渡、女川）の効果はあるが限定的であったため、堤体を復旧させるだけでなく、安定性、堤体の高さ、開口部の縮小などの改良が行われたと思われる。

・釜石の奇跡の実態を明らかにする必要がある（例えば「在校中の子供たちが自分の判断で逃げる」ことは一般常識からみてもあり得ない。）

・イオンについては、釜石の場合は賑わいを生む効果と、既存の商業施設の衰退を招くという両面がある。

・釜石市の人口はかつての約９万人（１９６０年代）から、現在は約３万人となっている。３万人の継続できるまちづくり計画が必要である。

・鵜住居は、大槌町の桜木町と同様に、釜石製鐵所のベッドタウンと思われる。そうであれば釜石製鐵所の人員縮小とともに人口が減少する可能性が高い。

【大船渡市】

津波	浸水高	越喜来などで約１５ｍ
	遡上高	綾里で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		５０１人（関連死８２人）
人口推移	２０１０年	４０，７３２人
	２０２０年	３４，７３８人
	増減率	－１５％
主要地域	吉浜、越喜来、綾里、赤崎、盛、大船渡、細浦、門之浜	

〇被害状況と復旧状況

・吉浜

・事前の高台移転で住宅被害は１～２軒。

・小中とも高台で無被害だが、吉浜中は２０２０年３月に大船渡第一中に統合となった。

・被害は漁港と農地。

・漁港が復旧し、大きな防潮堤ができて後背地の農地は耕作中。

・ただし、防潮堤が必要とは思えない。

・越喜来

・ほぼ全域が浸水、河口から１ｋｍの介護施設「さんりくの園」で死者５４名、現在は内陸側の高台で再開している。

・越喜来小は２０１２年に越喜来小、甫嶺小、崎浜小が統合（甫嶺小を仮校舎とした）。

・越喜来小の新校舎は２０１６年に高台に完成。

・大きな防潮堤と河口水門が完成、後背地に苺ハウス。

・介護施設跡に支所、診療所、歯科、スーパー、食堂、復興公営住宅などができた。

・ただし、越喜来に防集や復興公営住宅は少ない。

・甫嶺

・三鉄甫嶺駅を含め沿岸部は壊滅的な被害。

・旧・甫嶺小学校は越喜来小学校校舎を経てＢＭＸコースに。

・大きな防潮堤と三鉄の間には何もない、防潮堤の意味はないと思われる。

・鬼沢漁港に防潮堤はない・・住宅は浸水範囲外にある。

・小石浜

・小石浜は浸水範囲内の住宅は少なく、漁港は早期に復旧した。

・綾里

・漁港と低地部の被害が大きく、防潮堤の完成が遅い（工事中）。

・綾里小学校、綾里こども園、診療所・歯科診療所がある。

・綾里中は浸水外であるが閉校となって赤崎中と統合した。

・赤崎
　・大船渡湾東岸に沿った低地は大きな被害で、赤崎小、赤崎中も浸水し、両校とも震災後はガレキ置き場になった。
　・小中とも嵩上げ高台へ。赤崎中は綾里中と統合し東朋中に。
　・赤崎小の近くの嵩上げ地に新しい住宅がみられる。
　・学校跡地は総合グランドに。
　・沿岸部を埋立てて産業用地としたが、現在は空き地が多い。
　・海岸沿いの太平洋セメントも大きな被害を出したが、２ラインの内の比較的被害の小さい山側のラインを使ってがれき処理に貢献した。
・盛駅付近
　・津波の被害は小さく、市役所も盛小学校も高台にあって被害なし。
　・盛川沿いに大規模な復興公営住宅ができた。
・大船渡駅付近
　・盛川河口付近～ＪＲ大船渡駅（現在はＢＲＴ）～魚市場にかけて沿岸部は甚大な被害。
　・大船渡駅（ＢＲＴ）付近には、交流施設、商業施設キャッセン、カモメテラス、二つのホテルなどが集中的に開発された。
　・魚市場も復旧している
　・開発（商店やホテル）は観光に期待しているようだが過大である。
　・大船渡駅（ＢＲＴ）の東側に住宅建設計画（３００戸）があるが住宅建設は遅い。
・細浦
　・湾口に防潮堤と大きな水門ができた。水門は日本最大の海底設置型のフラップゲート。
　・湾内には防潮堤は無い（妥当）。
・門之浜
　・沿岸部が壊滅的に被災したことから、高い防潮堤ができている

〇１０年間の視察結果と感想
・中心部の商業施設の今後に注目（人口３万人に対して過大投資）。
・多くの地区（吉浜、越喜来、綾里、細浦、門ノ浜）の今後にも注目。
・未来に向けた人口３万人の継続するまちづくり計画が必要。

【陸前高田市】

津波	浸水高	市全域で約１５ｍ
	遡上高	断崖部で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１，８０３人（関連死４９人）
人口推移	２０１０年	２３，３００人
	２０２０年	１８，２３３人
	増減率	－２２％
主要地域	広田、小友、中心部、気仙町（今泉、長部）	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・死者率は全住民の約８％で、大槌町と同程度である。

・住宅地の整備までの時間が長く、住民が流出した可能性がある。

・広田

・広田半島の低地部は壊滅的な被害。

・主な産業は漁業で、数カ所ある漁港は全て復旧している。

・野外活動センターが完成、その付近に防集や災害公営住宅もある。

・広田診療所、保育園、小学校はあるが、中・高はなくなった。

・広田中は２０１３年に米崎中、小友中と統合し高田東中となった。

・小友

・東西両方からの津波で低地部（農地）やＪＲ大船渡線に大きな被害。

・おもな産業は漁業と農業（ともに復旧済み）。

・小友駅はＢＲＴとなった。

・小友小、小友保育所はあるが・・小友中は２０１３年３月閉校。

・中心部・・過剰投資と思われる

・中心部は住宅やあらゆる公共施設が壊滅的な被害。

・浸水範囲外の高台や嵩上げ地に大規模な復興公営住宅や戸建て。

・嵩上げた旧・中心街に大規模商業施設アパッセたかたが開業。

・市役所も仮設庁舎を経て、旧・高田小学校跡地に２０２１年４月に新庁舎が完成。

・低地部に運動公園や農地も完成。

・嵩上げ地の住宅予定は１５６０戸だが、中心部の住宅は多くない。

・気仙町（今泉・長部）

・嵩上げ土砂の送出後の高台に小学校、保育園、住宅を建設。

・住宅の予定は今泉地区全体で５６０戸。

・津波で流出していた姉歯橋が復旧し、近くに商業施設も完成。

・気仙川上流側に済生会陸前高田診療所（２０１７年２月）がある。

〇１０年間の視察結果と感想

・病院、小中学校、保育園、市役所などが高台に移設されたが、分散している。
・中心部には大きな商業施設アパッセたかたや公共施設など。
・中心部の嵩上げ地に住宅は少ない（大規模な復興工事に時間がかかると住民は戻らない）。
・１万８千人規模の継続できるまちづくりとは違ったまちになったと思われる（メンテナンス費用は国が負担してくれるのか疑問）。

【気仙沼市】

津波	浸水高	中心部８ｍ～大谷海岸１５ｍ
	遡上高	最大で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１，４３２人（関連死２７６人）
人口推移	２０１０年	７３，１５４人
	２０２０年	５９，６８９人
	増減率	－１８％
主要地域	唐桑、大島、鹿折、南気仙沼、松岩、波路上、大谷、小泉	

〇被害状況と復旧状況

・唐桑

・漁港や低地部の住宅に大きな被害。

・支所、小中学校は高台にあり被害なし。

・舞根は防潮堤がなく、低地の住宅は高台へ移転。

・大島

・津波はフェリー港付近で島を東西に越えた。

・大島大橋ができたことでフェリーが廃止、フェリー港の嵩上げ地に観光施設ができた。

・鹿折

・地域一帯が津波と火災で壊滅的な被害。

・市街地に第１８共徳丸が乗り上げた。

・介護施設・リバーサイド春圃で５９名が死亡、光が丘保養園に仮住まいの後に内陸側に移設。

・小中学校やこども園は浸水域外にある。

・浸水地が嵩上げされ、大規模な公営住宅や住宅地が整備された。

・メイン道路沿いが商業地域で多くの店舗ができている。

・港に近い側に水産加工団地ができた。

・鹿折川対岸の光が丘保養園（精神科等）は被害が小さく継続。

・南気仙沼駅付近

・魚市場付近など、壊滅的な被害。

・魚市場が再建され、ないわん、海の市、シャークミュージアムなどの観光施設、商業施設が完成している。

・現在も住宅地や商業地など大規模な開発が進行しているが、空き地が多い。

※なお、内陸台地にあるリアス・アーク美術館の被災展示は必見。

・松岩駅付近

・松岩駅～漁港は壊滅的な被害。

・漁港は復旧しているが、後背地は住宅建設禁止区域だと思われる。

・住民の移転先は高台の防集。

・面瀬川（松岩漁港）は津波を内陸へ誘導するように思われる。

・波路上（階上）

・国道４５道の東側のがほぼ全域が浸水した。

・杉ノ下の高台で９３名が死亡

・旧・気仙沼向洋高校が震災遺構となった。気仙沼向洋高校は内陸の仮設校舎を経て、現在は国道４５号の内陸側に再建された。

・沖ノ田川の復旧工事は自然破壊や津波防災の両面から悪評である。

・大谷海岸

・低地が広く浸水した。

・国道４５号と１線堤を合体させ、国道沿いを嵩上げして道の駅が新装。

・小泉

・津谷川河口付近の小泉地区は高台の小中学校、保育園を除いてほぼ全域が浸水、小泉大橋が流され、ＪＲ気仙沼線の高架も落橋。

・住民は三陸道の内陸側の防集へ。

・海岸から津谷川両岸にかけて高い防潮堤が完成（必要か？住宅などの守るべきものは無くなってしまった）。

・津谷川は津波を誘導すると思われる。

・河口部付近には大規模なハウス園芸（サンフレッシュ小泉）ができた。

・先々、幼小は津谷に吸収されると思われる（すでに中学校は閉鎖）。

・４５号の小泉大橋の付け替えが完成し仮橋は撤去された。

・ＢＲＴ駅（陸前小泉駅）が再開したが必要か（周辺に住民は住んでいない）。

〇１０年間の視察結果と感想

・中心部は観光施設に過大投資と思われる。

・ＢＲＴ南気仙沼駅付近の空地に住民が戻らない可能性もある。

・震災遺構は旧・気仙沼向洋高校と杉之下の高台をセットとすべき。

・大谷海岸の国道４５と１線堤を一体化は好事例。

・小泉はお金をかけて亡所づくりと思える。

・舞根（防潮堤の無い漁村）も漁村の好事例

・人口６万人の継続できるまちづくり計画が必要。

・中心部と積極的なサテライト拠点づくり。

【南三陸町】

津波	浸水高	約１５m
	遡上高	戸倉で２０m、袖浜で２７m
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		８３１人（関連死２０）
人口推移	２０１０年	１７，３７８人
	２０２０年	１０，９６４人
	増減率	－３７%
主要地域	歌津、清水浜、ベイサイドアリーナ、志津川、戸倉	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・内陸の入谷地区や志津川の高台の旭ヶ丘地区、ベイサイドアリーナ地区を除き、ほぼ全域が津波被害。

・人口減少率３７%は女川町に次ぐ。

・歌津

・高台の小中学校を除き、住宅地はほぼ全滅。

・漁港や沿岸を通る４５号のバイパスの橋桁は全て流された。

・伊里前漁港は復旧、商業施設ハマーレ歌津（本設）も復旧したが、周囲に住宅は無い

・歌津中の北に防集ができ、伊里前保育園もある。

・伊里前川の堤防は津波を誘導するだけの過剰投資施設と思われる。

・清水浜（しずはま）

・住宅や清水浜駅など全滅。

・漁港は復旧、５００m内陸に防集、ただし商店等は無い。

・桜川堤防は何を守るのか（周囲には何もない）。

・ベイサイドアリーナ周辺

・高台であり、津波被害はない。

・周囲に防集や規模の大きい災害公営住宅団地がある。

・町役場、病院、幼稚園、住宅などが移設された。

・志津川

・防災庁舎、志津川病院、住宅など町の中心部は壊滅的な被害。

・海抜１３mの津波避難場所であった特養・慈恵園で５０名が死亡、現在は内陸の入谷地区で再開している。

・小中学校、高校、保育園、旭が丘住宅は高台にあり被害を免れた。

・防集は高校の北、小学校の北の高台などにできており、旧・中心街に住宅は無く、さんさん商店街や防災庁舎など、観光施設化している。

・商業施設は天王前の国道４５号沿いにあるが、周囲に住宅は無い。

・志津川漁港は復旧している。

・戸倉

・海に近い住宅地はほぼ全滅。

・戸倉小や住宅（災害公営住宅や防集）は高台へ移転。

・戸倉中は２０１４年に志津川中に統合された。

・戸倉から石巻・十三浜にかけては大小さまざまな漁港あるが、漁港は復旧している。

〇１０年間の視察結果と感想

・旧・中心街は震災記念公園とさんさん商店街。生活に密着しないまちづくりは過大投資と思われる。

・２０年後を見据えた人口１万人のまちづくり計画が全くみえない。

【石巻市北部】

津波	浸水高	釜谷など約１０ｍ
	遡上高	小室２７ｍ、雄勝名振３５ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		石巻北部で約１，０００人
人口推移	２０１０年	石巻市全体に記載
	２０２０年	石巻市全体に記載
	増減率	石巻市全体に記載
主要地域	北上、河北、雄勝	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・北上地区、河北地区、雄勝地区とも壊滅的な被害。

・防集の適地が少なく、北上地区は「にっこりサンパーク（高台で従来から北上中学や運動公園がある）を拡張した。

・河北、雄勝は三陸自動車道・河北ＩＣの近くの双子地区に約３６０戸の防集・双子団地（雄勝２０２戸、河北１５２戸、北上１８戸）を造った。これにより雄勝中心部、河北の釜谷地区への帰還は減少する。

・北上地区

・十三浜地域の漁村の漁港や住宅に大きな被害。

・北上地区の死者・行方不明者は約２６０名、内、津波避難場所の北上総合支所で４６名が亡くなった。

・相川は事前の高台移転で無被害の団地「集団地」があるが、移転跡地の新たな住宅に被害か。

・小室は防潮堤が無い漁村として復旧した。

・にっこりサンパークに支所、小中学校、保育所、防集を集めたが、医療施設、介護施設はない（現在は上流側の橋浦にある）。

・相川小、吉浜小、橋浦小は統合され北上小となった。一時期は旧・橋浦小にあったが、現在は高台のにっこりサンパークに移設された。

・将来は、海抜ゼロメータの橋浦地区がどうなるかが課題である。

・河北

・多くの小学生が亡くなった大川小学校のある釜谷地区では、小学生や教員だけではなく、地域住民約２００名が亡くなった。大川小学校は津波避難場所であり、多くの住民が小学校に避難してくる中で、教員が小学生を連れて小学校外へ避難することは無理。

・河北地区の死者・行方不明者は約４４０名。

・大川小、大川中学校とも閉校となった。

・農地は復旧したが釜谷は亡所。

・長面浦は漁業が復旧したが、住宅は激減していると思われる。

・雄勝

・雄勝の旧・中心部や名振地区は壊滅的な被害。

・海岸沿いの雄勝病院では医師・看護師・入院患者の死者・行方不明者はあわせて６４名、雄勝全体では２３０名

・太平洋に面した大須地区は高台に住宅、小中学校、保育所などがあり、漁港を除いて被害はない。

・中心部に観光施設等ができ、雄勝、大須、船越、名振等の漁港も復旧しているが、防集は小さく、人口は被災前の約４，０００人から約１，０００人へ激減していると思われる。

・雄勝小中学校や診療所が大浜地区の断崖上にできた。

〇１０年間の視察結果と感想

・北上地区

・北上川沿い低地に橋浦地区のまちづくりを行った石巻市の見識を疑う（大川小学校の立地も同様）。

・高台のニッコリサンパークの活用は妥当。

・河北地区

・長浦の水産業と釜谷の農業は続くが、旧・河北町の中心部・釜谷は消滅。

・雄勝地区

・高い防潮堤の内側に人は住んでいない（無駄遣い）

・雄勝の中心部の人口は１００人以下に。

・人が残っている大須、名振等の漁村を含めた継続できるまちづくり計画を考えるべき。

・全体（北上・河北・雄勝）

・２０年後を見据えたまちづくり計画が必要。

【女川町】

津波	浸水高	約１８ｍ
	遡上高	約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		８７２人（関連死２２人）
人口推移	２０１０年	９，９３２人
	２０２０年	５，６６７人
	増減率	－４３％
主要地域	中心部と周辺の漁村	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・人口減少率４３％は宮城県・岩手県の市町村で最大。

・被災した女川湾口防波堤が復旧した。改善すべき点は下記であるが改善されたかどうかは不明。

・防潮堤をもっと高く、丈夫に　・開口部をもっと浅く、狭く

・中心部

・津波は女川湾に面した漁港、水産加工施設を飲み込み、一部は万石浦にまで流入した。町役場や小中学校、旭が丘などの高台を除き、港湾部や海抜１５ｍ以下の住宅に甚大な被害、高台の病院も１ｍ程度浸水した。

・大規模な復旧が進む。

・漁港、水産加工業は復旧。

・商業施設シーパルピアが２０１５年１２月に開業。

・病院は既存だが、町役場、小中学校は移転済み。

・高台に復興公営住宅や防集も整備された。

・地元スーパー（おんまえや）も復帰。

・オフサイトセンターが再建、原発の再稼働に自治体が同意。

・周辺の漁村

・全ての漁村が漁港と付近の住宅に壊滅的な被害を受けたが、漁港が復旧し、それぞれ小規模な防集が完成している。

〇１０年間の視察の感想

・漁業、水産加工業は継続できると思われる。

・人口規模（現在は５，５００人）とまちづくり規模がアンバランスと思われる。

・女川駅ゆぽっぽ、商業施設シーパルピアなど観光を狙ったものは次第にすたれてゆくであろう。町民から見れば「おんまえや」の復旧で十分。

・「海が見えるまち」の構想の下に、大規模な嵩上げや高台造成で住宅地を造ったが過大投資と思われる。メンテナンス費用も気になる。

・旧・町役場、小中学校、運動公園などは浸水被害を受けておらず、この付近と、旭が丘付近の拡張で対応できたと思われる。

・復旧に時間がかかれば人口は減少する（多分、石巻へ転居）

・人口５千人の継続できるまちづくり計画が必要。

【石巻市（北部を除く）】

津波	浸水高	約５m～７m（南浜）
	遡上高	萩浜（桃浦）で約１０m
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		３，９７１人（関連死２７６人）
人口推移	２０１０年	１６０，３９４人
	２０２０年	１３９，４５０人
	増減率	－１３%
主要地域	東（女川方面）は万石浦、西（東松島方面）は定川まで	

※死者数や人口は石巻市全体

〇被害状況と復旧状況

・石巻市全体の地域別直接死（概数）

・北上　　２６０人

・河北　　４４０人・・・釜谷と長浦の住民と大川小の子供たち

・雄勝　　２３０人

・牡鹿　　１００人

・本庁　２，４００人・・・特に渡波、南浜

・合計　３，４３０人

・渡波地区

・浸水深約２mで広範囲に住宅被害。

・海岸近くの渡波中は内陸へ移設、移設先の周辺が住宅地に。

・渡波中の隣の市立女子商は日和山の市立女子高と統合され、桜坂高校に校名が変更された。

・魚市場付近（湊地区）

・浸水高７mの津波で魚市場や水産加工業が大きな被害を受けたが、完全に復旧したように見える。

・魚町の陸側を走る県道２４０号が嵩上げされ、その陸側も嵩上げされて住宅地となっている。

・南浜地区

・ほぼ全域が津波と火災の被害に遭った。

・沿岸の市立病院は石巻駅前に移設された。

・門脇小は震災遺構となり、２０１４年に石巻小に統合された。

・日和山の裾野近くの復興公営住宅を除いて、ほぼ全地域が震災記念公園化している。

・海岸や旧北上川の両岸には高い防潮堤が造られた。

・旧北上川河口近くに大きなアリーナが再建された。

・日和大橋の上流に南浜と港地区を結ぶ橋梁（仮称・鎮守大橋）が建設中。

・海岸部の防潮堤と鎮守大橋の必要性は疑問である。

・石巻中心部の防潮堤と中瀬
　・旧北上川両岸に大きな堤防が完成している。
　・中瀬の上流に中瀬を経由しない橋梁が完成するとともに、中瀬を経由する橋梁も整備が進んでいる。
　・なお、中瀬（マンガ館を含む）は津波に対しては無防備である。
・石巻駅付近
　・日和大橋付近にあって津波被害を受けた市立病院が石巻駅近くに建設された。
　・市役所は駅前の商業施設を２００８年に譲渡され、２階以上を使用しているが、２０２０年４月に１階にイオンが入居し、外観はイオンと市役所が同居しているように見える。
・蛇田地区
　・震災時に多くの住民避難を受け入れたイオンモール石巻を中心に大型な商業施設が集まっている。
　・津波の浸水被害が小さい地域であり、のぞみ野、あゆみ野、恵み野など、災害公営住宅建設や住宅開発が進んでおり、ＪＲ仙石線に新駅「石巻あゆみ野駅」ができた。
　・石巻あゆみ野駅の１ｋｍ南西の定川沿いにある運動場・上釜ふれあい広場は震災直後に土葬場所となったところである。

〇１０年間の視察結果と感想
・石巻漁港付近の水産業は壊滅的な被害から復旧した。
・日本製紙石巻工場も津波被害を受けながら半年で操業を再開した。
・蛇田地区を見ると、人は海岸近くの嵩上げ地ではなく、安全で便利な内陸に住みたがると思われる。
・石巻市全体では１３％の人口減少ではあるが、現状を維持できるのではないかと思われる。

【東松島市】

津波	浸水高	約５ｍ
	遡上高	野蒜の東側で約１０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		２，１５５人（関連死６６人）
人口推移	２０１０年	４２，８４０人
	２０２０年	３８，９０３人
	増減率	－９％
主要地域	大曲～矢本、小野、野蒜・東名、宮戸島	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・東松島市の中央に航空自衛隊松島基地があり、被災地は東の大曲、西の小野・野蒜・東名・宮戸島の２方向に分かれる。

・大曲～矢本

・大曲の北上運河の南側は壊滅的な被害で、多くの死者を出したために東矢本駅北側のあおい地区に大規模な集団移転を行った。

・大曲の移転跡地は公園・工場などに。

・石巻あゆみ野駅の西側はすぐに東松島市であり、県立石巻西高校も東松島市にある。石巻あゆみ野駅の西側に小規模ではあるがスマートタウンができている（おそらく補助金活用でしょう）。

・小野

・松島基地と成瀬川の間の地域だが、詳細には視察していない。

・仙石線の南側の被害が甚大だが、残った住宅もある。

・浜市小学校は小野小学校と統合し鳴瀬桜華小学校となった。被害が小さかった旧・小野小学校校舎を使用した後、２０２１年４月に国道４５号の北側の台地に新校舎が完成した。

・成瀬第一中に津波は到達していないが、被害が大きかった野蒜の鳴瀬第二中と統合し、鳴瀬未来中となった。まず旧・成瀬第一中を仮校舎としたのち、２０１８年に対岸の上野蒜（浸水範囲外）に新校舎が完成した。

・野蒜・東名

・野蒜・東名地区とも壊滅的な被害。

・東名の、東名運河の南にある介護施設・不老園では、避難途中および避難先の野蒜小体育館で津波に襲われて５６名が亡くなった。現在は野蒜ヶ丘に移転・再開している。

・ＪＲ仙石線（野蒜駅、東名駅）も甚大な被害。旧・野蒜駅は現在東松島市の震災伝承館となっているが、震災後は工事関係者向けにコンビニのファミマが開店し２０１９年２月まで営業を続けていた。

・北側の大地を切り拓き、住宅地・野蒜ヶ丘を造成、ＪＲ仙石線（野蒜駅、東名駅）も移設、野蒜小学校は宮戸島の宮戸小学校と統合して宮森小学校

として野蒜ヶ丘に移設された。また、介護施設・不老園や保育園、医院、支所なども移設され、小さいながらもスーパーもある。

・運河より北側は残った住宅も多く（特に東名地区）、運河沿いには運動公園が整備された。

・運河より南側に住宅は皆無に近く、簡保の施設、ユースホステルなども閉鎖され、農地や太陽光発電所となっている。のびる幼稚園も全壊で、現在は矢本西地区に移り、園の名称を引き継いでいる。

・野蒜の南端の野蒜漁港は完全に復活しているように思われる。

・宮戸島

・数カ所に漁港と集落があって津波被害を受けたが、漁港は復旧し、各集落に防集もできている。

・宮戸小学校が野蒜ヶ丘の宮野森小に統合した。保育園や商店は見当たらない。

・元来、宮戸島は奥松島という観光地だが、観光がどこまで復旧できているかは調べていない。

〇１０年間の視察結果と感想

・大曲地区の移転（内陸２．５ｋｍの元・農地へ）は集団移転の代表例の一つとなると思われる。

・野蒜ヶ丘もＪＲ仙石線の高台への移設を含め、高台の造成地への集団移転の代表例となると思われる。

・小野のコンパクトなまちづくりと宮戸島の観光対策が課題と思われる。

【塩釜市】

津波	浸水高	約３～５ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		４２人（関連死１８人）
人口推移	２０１０年	５６，２２１人
	２０２０年	５２，２５６人
	増減率	－７％
主要地域	塩釜港付近	

〇被害状況と復旧状況：

・塩釜港付近

・津波被害は塩釜港付近のみ。

・津波浸水深は２～３ｍで建物の１階部分に大きな被害。

・新・魚市場が２０１７年１０月に完成。

・塩釜市全体は仙台のベットタウン化していると思われる。

〇１０年間の視察結果と感想

・津波被害は塩釜港沿岸部のみで、震災後に２ｍ程度の防潮堤の建設が行われ、被害を受けた建物は現地で修復または立替えられている。

・塩釜市全体は仙台のベットタウンとして継続するのであろう。

【多賀城市】

津波	浸水高	約３～５ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		２１９人（関連死３１人）
人口推移	２０１０年	６２，９９０人
	２０２０年	６２，０３０人
	増減率	－２％
主要地域	産業道路沿い	

〇被害状況と復旧状況：

・被害は砂押川の南側の住宅地と、仙台港の奥から北西に伸びる産業道路沿いに発生している。

・産業道路の北側に並行する水路に、折り重なって落ちた車両の中で多くの死者が発生した。

※産業道路沿いの写真は仙台市のページに掲載している。

・住宅街を襲った津波の浸水深は１．５ｍ以下で、多くの住宅が修復して残っているが、規模の大きい復興公営住宅もある。

〇１０年間の視察結果と感想

・産業道路沿いの商業施設等は復旧している。

・死者は多いが、住宅などの建物被害はほかの被災地と比較して小さい。

・市庁舎や多くの住宅は高台にあり、津波防災の面では特に大きな課題は無い。

【七ヶ浜町】

津波	浸水高	約３～７ｍ
	遡上高	菖蒲田浜で１２ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		８１人（関連死３人）
人口推移	２０１０年	２０，３５３人
	２０２０年	１７，８８３人
	増減率	－１２％
主要地域	菖蒲田浜、花渕浜、吉田浜、代ヶ崎浜、仙台火力	

〇被害状況と復旧状況

・町全体

・仙台のベットタウン化しており、台地上に多くの住宅があるが被害はない。

・大きな被害は漁港や、菖蒲田浜、花渕浜などの沿岸部の住宅。

・復興公営住宅にコミュニティづくりの工夫がなされている。

・菖蒲田浜

・大きな被害が出たため、大きな防潮堤が建設された。

・かつての住宅地は壊滅的な被害で、笹山地区の高台に集団移転した

・約１００世帯の復興公営住宅がある。

・花渕浜

・約５０世帯の復興公営住宅がある。

・吉田浜

・二つの漁港が被害を受けたが復旧している。魚市場付近にはホテルやレストランができるなど観光地化している。

・代ヶ崎浜

・漁港は被害が小さそうで漁港も住宅も復旧している。

・防潮堤は嵩上げ面から１ｍ程度。壁面を使って「よがさきおはじきアート」ができて観光客を呼んでいる。

・仙台火力

・津波によって大きな被害を受けたが、約１年後に復旧した。

〇１０年間の視察結果と感想

・沿岸部は被害を受けたが、町役場、小中学校、高台の住宅団地等に被害はない。

・沿岸部の漁港は復旧しており、今後、大きな変化はないと思われる。

【仙台市】

津波	浸水高	約４～９ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		９５０人（関連死２６５人）
人口推移	２０１０年	１，０４６，７３７人
	２０２０年	１，０９１，９９２人
	増減率	＋４％
主要地域	仙台港、蒲生・中野、荒浜、東六郷地区	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波は沿岸から内陸４ｋｍまで侵入しているが、被害が大きい地域は仙台東部道路よりも東側である。

・宮城野区蒲生の中野地区、若林区の荒浜地区での被害が大きい。

・仙台港付近

・産業道路沿いの商業施設の１階に被害。

・多数の車が流され水路に折り重なり、多くの死者が出た。

・仙台港の復旧は早く、震災５日後には支援物資の陸揚げを、約１週間で一般荷役を再開している。

・仙台港の南側の工業地帯は停電のため、復旧までに半年を要した。この中には、社員は全員津波避難したが、協力会社員１２名に避難指示が伝わらず亡くなった企業がある。

・蒲生・中野

・蒲生干潟が被害を受けたが、ガレキを撤去して再生している。

・中野地区は住宅禁止となり、４ｋｍ程内陸側の田子西地区に集団移転した。中野小は中野栄小に統合され、中野小跡地には「中野モニュメント」ができた。

・荒浜

・荒浜は壊滅的な被害。

・荒浜集落の南端の介護施設・潮音荘では１階天井まで浸水し、入所者と職員あわせて８名が亡くなった。現在は内陸の泉区に移転して泉音の郷として再出発している。

・荒浜小と、流出後の住宅基礎が震災遺構となった。荒浜小は浸水域外の七郷小に統合された。

・現在は高い防潮堤の内側は、貞山堀の両側は防災林で、荒浜には防潮林の中に小さなスケートボード場がある。

・防潮林の内陸側には広大なＪＲフルーツパーク、馬術上、冒険広場などがある。いずれも地味な施設であるが、長続きしそうである。その内陸側は東部復興道路で、更にその内側は仙台東部道路まで広大な農地となっている。

・なお、荒浜などの沿岸部の住宅の移転先は主に荒井駅付近である。

・東六郷地区

・東部復興道路の海側は住宅禁止区域と思われ、住宅は１軒もない。

・藤塚の集落の跡地には、アグアイグニス（温泉施設など）が建設中であるが、荒浜と閖上に挟まれた地で、どこまで集客できるかは不明。一方、防潮堤から名取川対岸の閖上地区を見ると、嵩上に多くの住宅が見え、閖上と藤塚の違いが良くわかる。

・東六郷小は１階天井まで浸水した。現在は六郷小に統合された。

〇１０年間の視察結果と感想

・仙台の沿岸部は、防潮堤～防潮林～農地や公園～東部復興道路（２線堤）～農地や既存宅地～仙台東部道路（３線堤）となっている。基本はこれでも良いと思うが、個人的には３線堤があるので、２線堤が不要、もしくは１線堤の規模の縮小が可能と思われる。なお、仙台市内に海水浴場は見当たらない。

※沿岸から内陸に向けた構成は、これより南の名取市から亘理町まではそれぞれ異なる。

【名取市】

津波	浸水高	約４～８ｍ
	遡上高	北釜で約１２ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		９９２人（関連死４２人）
人口推移	２０１０年	７３，６０３人
	２０２０年	７９，２５６人
	増減率	＋８％
主要地域	閖上、北釜、美田園	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波は海岸から内陸へ５ｋｍほど侵入して仙台東部道路を越えたが被害が大きいのは沿岸部の閖上と北釜で、現在、北釜に住宅は１軒もない。

・震災後、人口が増えている（＋７％）が、主に美田園～杜せきの下の発展と思われる。

・閖上

・沿岸部一帯が津波高約８ｍで壊滅的な被害。

・名取市の死者の大半は閖上で、津波避難場所の閖上中学校の屋外階段下で、避難者の滞留のため多くの遺体が見つかっている。

・介護施設「うらやす（うららか、やすらかの略）」では、ケアハウス３階に避難した入所者は助かっているが、警察官の指示で閖上中学校に避難したグループが途中で３４名が死亡した。なお、現在、「うらやす」は内陸側の増田地区で再開しているが、旧・うらやすの建物は解体されていない（理由は不明）。

・閖上地区は漁港が復旧し、住宅地を嵩上げして災害公営住宅（１階はピロティ―）、多くの戸建て、商業施設、小中学校、保育園などが移転している（医療機関はないようだ）。

・閖上には朝市やサイクルセンター、宿泊温泉施設「輪りんの宿」、みちのくトレイルセンター、かわまちテラス閖上など、多くの観光施設が完成している。

・北釜

・仙台空港の東側の集落で、津波により壊滅的被害を受けた。

・神社・寺院を残して住宅は無い（亡所）。

・住民の多くは美田園に移転したと思われる。

・北釜防災公園はだれのため、何のための公園か不明である。

・美田園～杜せきの下

・仙台空港鉄道の美田園駅付近で浸水深は２ｍ程度と思われる。杜せきの下付近は浸水していない。

・震災後に防集（美田園北団地）を含む多くの住宅、学校、商業施設が集まっている。

・海岸～美田園の津波防御計画が不明（現状では沿岸部の防潮堤から美田園間に津波防御施設は見当たらなかった）。

○１０年間の視察結果と感想

・閖上の街の再建は嵩上げを行なってはいるが、現地再建（海岸の近く、名取川の川岸）である。仙台東部道路より内陸側（浸水範囲外）に新たな町を造るべきでは、または県道塩釜亘理線を嵩上げて、その内陸側に住宅地を造るべきではなかったか（岩沼市の玉浦西と同様に）。

・かわまちテラスは観光客相手（町民は食彩館を利用する）・・何時まで継続できるかは疑問である。

【岩沼市】

津波	浸水高	約３～９ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		１８７人（関連死６人）
人口推移	２０１０年	４４，１６０人
	２０２０年	４４，３９６人
	増減率	＋１％
主要地域	臨空工業団地、相野釜～長谷釜～二ノ倉、玉浦西	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波は海岸から内陸へ５ｋｍほど侵入して仙台東部道路を越えたが被害が大きいのは沿岸部の集落である。

・震災後、岩沼市の人口は名取市程ではないが微増（＋１％）。

・臨空工業団地

・大きな工業団地を浸水深２ｍの津波が襲ったが、致命的な被害までは至っておらず、多くの企業が早期再開した。

・相釜～長谷釜～二ノ倉など沿岸地域の集落

・浸水高４ｍ～８ｍの津波で多くの集落が壊滅的に被災し、玉浦西地区に集団移転した。

・相釜の介護施設・赤井江マリンホームは壊滅的被害であったが、空港への避難が成功し犠牲者はいない。現在は玉浦西地区に移転している。

・二ノ倉工業団地は臨空工業団地よりも海岸に近く、被害も大きく復旧が遅れ、復旧施設はまばらでもある。二ノ倉工業団地の今後は不明。

・岩沼市の南側にある南浜病院は１階が浸水したが、入院患者は３階へ避難して全員無事、しかし職員１名が１階で亡くなった。

・玉浦地区

・沿岸の被災集落は玉浦西地区に集団移転した。

・玉浦地区には元々小中学校があり、集団移転（西地区）には大きな商業施設・食彩館や児童施設もでき、介護施設の赤井江マリンホームも玉浦地区に移転してきた。玉浦地区は今後も発展しそう。

・玉浦西地区の西側（海側）に２線堤（玉浦希望ライン）が完成（２０１８年）

・玉浦地区の都市排水用に二ノ倉排水機場が完成した。玉浦の都市排水を貞山堀をまたいで海へ排水している。

・農業用排水機場も復旧している。

〇１０年間の視察結果と感想

・臨空工業団地が再開し、沿岸の住宅の集団移転の成功し、農地も復旧している。

・課題は貞山堀より海岸に近い二ノ倉工業団地の今後と南浜病院の安全対策。震災当時よりも防潮堤は強化されているが、次回の建て替え時には津波浸水範囲外への移転が望ましい。

【亘理町】

津波	浸水高	約５～８ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		２８７人（関連死１８人）
人口推移	２０１０年	３４，７９５人
	２０２０年	３２，８８９人
	増減率	－５％
主要地域	鳥の海・荒浜、新・町役場付近、長瀞・浜吉田	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波は海岸から内陸へ５ｋｍほど侵入しているが、被害が大きいのは鳥の海と阿武隈川にはさまれた亘理・荒浜地区である。

・沿岸部の農地が広範囲に被災した。

・ＪＲ常磐線より内陸側の比較的高いところにある旧・町役場などの中心街に津波被害はない。

・鳥の海・荒浜

・太平洋岸は津波高７～８ｍの津波が襲来、阿武隈川沿いは堤防を越えた津波が落下して家屋を襲い壊滅的な被害。

・荒浜小は周囲の住宅よりも１ｍ程度高いところにあり、被害軽微で継続使用されている。荒浜中は１階が被災し解体されたが、現地再建した（１階はピロティ形式に）。

・鳥の海は漁港と商店と公園が復旧しているが、観光客をどこまで呼べるか（継続性）は疑問。

・西木倉（浸水範囲）に復興公営住宅がある。

・新・町役場付近

・浸水範囲の境界付近に新・町役場が完成。

・近くに多くの住宅（浸水範囲だが）や商業施設ができた。

・産業用地も用意されているが、まだ空き地が多い。

・長瀞・浜吉田

・津波高５ｍの吉田浜は住宅が残っていないが、３ｍ程度の長瀞小は現地再建（従来の小学校敷地の隣りに建設）している。

・農地（大規模な苺ビニールハウス）と太陽光発電が多い。

〇１０年間の視察結果と感想

・亘理町全体で小中学校の移設はない

・沿岸から１ｋｍ程度までは、防潮堤～防災林～太陽光発電または農地で住宅は無いが、それより内陸側の浸水区域には農地（いちごファーム）の中に住宅もある。

・新・町役場は浸水区域へ。新・町役場から荒浜方向の道路沿いには住宅や商業施設が建設されている。

・積極的な町づくり計画は無いように思われるが、人口はそれほど減少していない。

【山元町】

津波	浸水高	海岸付近で約８ｍ
	遡上高	磯山で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		７１８人（関連死２０人）
人口推移	２０１０年	１６，６０８人
	２０２０年	１１，７４３人
	増減率	－２９％
主要地域	新旧・山下駅付近、合戦原、新・坂元駅付近	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・海岸から２～４ｋｍ内部まで浸水。

・沿岸部の集落で大きな被害、死者は亘理町や新地町と比べて多い。

・ＪＲ常磐線を約１ｋｍ内陸側へ移設。

・新・ＪＲ常磐線より海側には、旧・山下駅付近を除いて住宅は無い。

・防集は下記の３ヶ所で、嵩上げ地にコンパクトな町づくり。

・新・山下駅前

・合戦原（国立・宮城病院付近）

・新・坂元駅前

・沿岸部は防潮堤～防潮林～農地（イチゴ団地など）と公園に。

・新旧・山下駅付近

・海岸近くの介護施設・梅香園などで入所者・職員合わせて６６名が亡くなった。

・海岸近くの山下第二小は新・山下駅前に移転

・旧・山下駅前のふじ幼稚園、東保育所で幼児が亡くなったが、ふじ幼稚園は浸水範囲外へ移転、東保育所は廃止（あらたに新・山下駅前につばめ保育所が開所）。

・新・山下駅前の嵩上げ地に大きな防集が完成、駅前には薬王堂、フレスコ（スーパー）などの商業施設がある。

・新山下駅裏には山元町地域交流センター（山元町防災センターを併設）ができた。田所食品のブドウ園・果汁工場・アンテナショップがあり、賑わっている。

・旧・山下駅付近には住宅が残っており、居住者もいる。

・農地の数カ所に大規模ないちご農園がある。

・合戦原

・防集に隣接して、介護施設（旧・梅香園）の移転先として第２みやま荘ができた。

・国立・宮城病院が改築された。

・新・坂元駅付近

・新・坂元駅前の嵩上げ地に防集が完成し、駅に隣接して観光施設「やまもと夢いちごの郷（食品売り場やフードコートを併設）」がある。

・旧・坂元駅の北にあった常磐山元自動車学校で教習生２５名と職員１名が亡くなった。

・中浜小は坂本小に統合され、校舎は震災遺構となった。

・坂本川の防潮堤は津波を誘導しかねない。

・磯浜漁港は復旧しているが、付近に住宅はない

〇１０年間の視察の結果と感想

・旧・常磐線と海岸までの間の人口が多かったことが、山元町の死者数が多い原因。

・北の亘理町や南の新地町と比較して人口減少率が大きい。ＪＲ常磐線を移設し、３カ所のコンパクトシティが完成し、防集の好事例だが、時間がかかりすぎたことが人口減の原因と思われる。

・ただし、これから先、人口減少は抑えられると思われるので注視。

・震災後の復旧は時間との争いの面がある。

・コンパクトシティは事前対策で行うべき計画と思われる（南海トラフ地震に向けた貴重な教訓）。

【新地町】

津波	浸水高	海岸付近で約１０ｍ
	遡上高	磯山で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１０８人（関連死９人）
人口推移	２０１０年	８，４４９人
	２０２０年	７，９２３人
	増減率	－６％
主要地域	沿岸部、新・新地駅～中心部、新地火力発電所	

〇被害状況と復旧状況

・沿岸部（埒浜～釣師）

・沿岸部の埒浜、釣師、大戸浜は壊滅的な被害

・防集や復興公営住宅は数カ所に分散、最大は雁小屋に

・沿岸部は建築制限区域に（防潮堤～防潮林～公園など）、特に釣師防災緑地公園は規模が大きい。

・釣師浜漁港は復旧

・新地駅～中心部

・ＪＲ常磐線は少々内陸側に移して嵩上げている。

・新地駅は新築で周辺にホテル、温泉施設、文化交流センター、数件の食堂・商店などができている。

・新地駅～町役場の間の開発（まちづくり）は進行中で、西側（国道６号線沿い）に商業施設（薬王堂）もできた。

・新地火力発電所は脱炭素化へ（ＬＮＧ発電所とバイオ発電所ができた）。

・新地町の生活環境について

・中学校１、小学校３、保育所３

・医療機関は渡辺病院やクリニックなどがある。

・商店は薬王堂、コメリ、フレスコ（スーパー）、コンビニなど。

〇１０年間の視察結果と感想

・生活環境はそろっている

・人口８，０００人のコンパクトなまちづくり

・１拠点、２サテライトぐらいか

・新地駅付近の多重防御は過大投資でメンテが大変と思われる。

【相馬市】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	各地の断崖部で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		４８４人（関連死２９人）
人口推移	２０１０年	３８，１３９人
	２０２０年	３４，４６９人
	増減率	－１０％
主要地域	相馬港・相馬漁港付近、松川浦、磯部、八沢浦干拓北側	

○被害状況と復旧状況

・全体

・死者・行方不明者の大半は原釜地区（約２００名）と磯部地区（約２００名）。

・相馬港・相馬漁港付近（原釜）

・沿岸の原釜は壊滅的被害で、死者・行方不明者は約２００名。

・集団移転先は南入野や北高野などの住宅団地（防集）。

・相馬港は復旧、後背地は緑地、こども公園、太陽光発電所など。

・相馬漁港が復旧し、浜の駅松川浦ができて賑わっている。

・松川浦

・破堤していた砂嘴・大洲が復旧し、大須の上を通過する海岸道路も完成し、浜の駅～大洲～磯部水産加工施設を結ぶ観光ルートができた。

・磯部

・沿岸の磯部集落は壊滅的被害で、死者・行方不明者は約２００名。

・集団移転先は山信田住宅団地など。

・磯部集落の跡地は大規模な太陽光発電所に（磯部は亡所に）。

・松川浦に面した磯部漁港は復旧し、磯部水産加工施設ができた。しかし、周辺に住宅は１軒も無い。

・磯部小・中は高台にあり無被害だが、人口減少で近いうちに閉鎖・統合される可能性がある。

・八沢浦干拓北側

・津波は干拓地内部５ｋｍまで遡上したが、営農は再開している。

・沿岸部高台の三星化学工業は震災後１ヵ月で操業を再開している。

〇１０年間の視察結果と感想

・相馬市中心部は内陸の相馬駅周辺にある（無被害）。

・相馬港、相馬漁港、磯部漁港とも復旧、観光施設も復旧している。

・被害が甚大な原釜と磯部は亡所に。

・相馬市全体としては震災前と大きくは変わらないと思われる。

【南相馬市】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	各地の断崖部で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年３月）		１，１６１人（関連死５１７）
人口推移	２０１０年	７１，７３２人
	２０２０年	５９，３３９人
	増減率	－１７％
主要地域	八沢浦干拓の南半分、南海老・北右田・南右田、真野漁港・烏崎、原町火力発電所、新田川～萱浜～雫、大内新興化学など、太田川、小高川・減容化施設、井田川・宮田川	

○被害状況と復旧状況（南相馬は広い、鹿島区、原町区、小高区）

・全体

・沿岸部は津波で甚大な被害、主なところでは北から、鹿島区の南海老、右田、烏崎、原町区の渋佐、萱浜、雫、小沢、小高区の塚原、村上、井田川、浦尻の集落で、すべてが亡所である。

・南相馬市の南部（小高区）は福島第１原発から２０ｋｍ圏内にあって避難指示区域となった。旧・避難指示区域の居住者／住民登録は４，３００人／７，６００人≒５７％（２０２１年３月現在）。

・南相馬市では津波被害による直接死が多いが、多くの市民が原発避難を強いられたことによる関連死は全市町村の中で最も多い。

・鹿島区

・八沢浦干拓（南半分）は内陸５ｍまで津波が遡上したが、現在は営農を再開している。

・真野川の北側（南海老、北右田、南右田）は防潮堤～防潮林～太陽光発電～農地で、北右田、南右田（亡所を宣言済み）に住宅はほとんどない。

・真野川の南では、真野川漁港は復旧したが、周囲（烏崎）に住宅は無く、烏崎の集落は消滅（鹿島小学校付近に多くの防集がある）。

・原町区

・原町火力は津波により停止したが、約２年後に運転再開。

・原町火力の南側に「南相馬市メモリアルパーク」ができた。

・新田川の南側も防潮堤～防潮林～太陽光発電。

・下渋佐～萱浜～雫は亡所。

・その内陸側に南相馬市復興工業団地（ロボットテストフィールドなど）ができた。

・海岸から２ｋｍの上渋佐の介護施設ヨッシーランド（浸水想定範囲外）で３７名が亡くなった。ヨッシーランドが周辺の道路よりもわずかに低かったことが災いした。ヨッシーランドは６ｋｍほどの内陸部に移った。

・沿岸の崖上の大内新興化学（標高２０ｍ）は福島第一原発から２０ｋｍ圏に

数m掛かり、営業を１年間停止した。現在は事業を再開・継続している。

・太田川の南側（下江井）では沿岸部（小沢地区）は亡所で、地域は防潮堤～防潮林～太陽光発電～農地（補完工事中）。

・小高区

・小高川の北側は防潮堤～防潮林～農地（耕作中）。

・小高川の南側は防潮堤～防潮林～太陽光発電～農地（復旧工事中）。

・宮田川北の沿岸部高台の減容化施設（旧・ＤＮＰ）は稼働中。

・宮田川・井田川の間は大規模太陽光発電。

・人口減のため、小高区では小学校４校（小高、福浦、金房、鳩原）を小高小学校に統合した（２０２０年３月）。

・小高病院は規模を縮小し、診療を再開している。

〇１０年間の視察結果と感想

・ＪＲ常磐線や国道６号はほとんどが津波浸水区域外で、南相馬市の人口密集地は津波被害に遭っていない。

・一方、福島第一原発から２０ｋｍ圏の沿岸部は津波と原発避難でほとんどが亡所に。

・小高区の人口減少が激しい（原発が近いため）。小高区の将来のまちづくり計画が課題。

【浪江町】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	北部の断崖部で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		６２５人（関連死４４０）
人口推移	２０１０年	２１，５７７人
	２０２０年	１７，１２２人
	増減率	－２１％
主要地域	北棚塩、南棚塩、請戸、中浜、中心部、津島	

○被害状況と復旧状況：

・全体

・直接死１８５名の大半は請戸地区。

・関連死は南相馬市、富岡町に次いで多い。

・居住者／住民登録は１，６００／１６，４００≒１０％（２０２１年7月現在）で、富岡町と同等。

・北棚塩

・段丘上に棚塩産業団地を新たに開発。

・福島水素エネルギー研究フィールド

・福島ロボットテストフィールド（浪江滑走路）

・（株）ウッドコア（木材工場）

・太陽光発電

・西にあるエスエス製薬工場は休止したまま。

・南棚塩

・津波は内陸へ２ｋｍ遡上し、地域の集落は壊滅的な被害。

・貴布禰神社に説明文（亡所）。

・防潮堤～防潮林～減容化施設～農地（再開している）。

・カントリーエレベータを建設中。

・請戸地区

・漁港や住宅などが壊滅的な被害で多数が死亡、加えて、原発避難。

・漁港・水産加工施設は再開したが、漁港付近に住宅はない。住宅はなみえ創成小中学校の近くの防集へ（原発避難で住民は少ない）。

・請戸小は震災遺構に（令和３年１０月予定）。

・中浜（双葉町との境界付近）

・請戸小の南側の沿岸部で亡所に。

・中心部

・ＪＲ常磐線は２０１７年４月に浪江駅より北方面が再開、２０２０年３月に浪江駅から南方面（浪江～富岡）も再開し、常磐線が全線復旧（最後まで不通だった範囲は浪江～双葉～大野～夜ノ森～富岡）。

・町役場（既存）を中心に、診療所、なみえ創成小中学校、にじいろこども園、

イオン、ホテル「双葉の杜」などが開設。

・町役場近くに道の駅もでき、大堀相馬焼売り場が併設されている。

・幾世橋住宅団地（戸建てと、エレベータを増設した集合住宅）ができたが、住民は少ない。

・特養・貴布祢は再開していない。

・内陸部のオンフール双葉は２０１６年にいわき市に移設した。

・津島地区

・今も帰還困難区域。

・主要道路は通行できるが、周辺施設に入ることはできない。

・あらゆる建物・施設が管理されずに１０年が過ぎた。

〇１０年間の視察結果と感想

・現在、帰還率は１０％。南は福島第一原発がある双葉町であり、今後も帰還が進むとは思えない。

【双葉町】

津波	浸水高	約１０ｍ
	遡上高	断崖部で約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１７６人（関連死１５４）
人口推移	２０１０年	７，１７８人
	２０２０年	５，８８４人
	増減率	－１８％
主要地域	中野地区（交流施設等）、中心部、福島第一原発付近	

〇被害状況と復旧状況：

・全体

・津波被害は沿岸部の北半分、中浜、両竹、中野地区。南半分は海岸段丘で福島第一原発へと続く。

・双葉町役場は現在もいわき市にある。

・町内に居住者はいない。

・死者のほとんどが関連死。

・中野地区

・東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町産業交流センターができた。双葉町産業交流センターは実質的には東京電力復興本社。

・伝承館の横にホテル（工事作業者用）、建設工事機材置き場（カナモト）などがある。

・耕作は始まっていないようだ（そもそも耕作者がいない）。

・中心部

・復旧済みは双葉駅と駅前広場と伝承館への道路のみ。

・慰霊碑が６号沿いに（関連死が続いているためか、犠牲者名は記されていない）。

・現在も町役場は戻っておらず、町全体が亡所のイメージ。

・福島第１原発付近

・中間貯蔵施設の工事が進む（住民は半永久的に戻れない）。

〇１０年間の視察の感想

・住民がいない状況での伝承館がこの場所にある意味が理解できない。さらに、原発事故で国民に迷惑をかけ、おそらくは国民の税金でできたはずの伝承館が有料とは驚き！！

・双葉町産業交流センターは実質的に東京電力復興本社。

【大熊町】

津波	浸水高	熊川河口部で約１０ｍ
	遡上高	断崖部で約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１４１人（関連死１２８）
人口推移	２０１０年	１１，４０５人
	２０２０年	１０，２７１人
	増減率	－１０％
主要地域	福島第一原発付近、中心部、熊川流域、大川原地区	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波が浸水した範囲は熊川河口付近の幅１ｋｍほどである。

・居住者／住民登録＝２５０／１０，２８８≒２．４％（２０２０年８月現在）なお町民以外を含めた居住者は８５４人。

・福島第１原発に最も近い介護施設・サンライト大熊（社会福祉法人・もみのき会）は、震災直後にデンソー福島工場に一時身を寄せた後に会津]若松に避難。現在は休止中だがグループホームを大川原に立ち上げた。

・死者のほとんどは関連死で、双葉病院関係者で５０名。

・福島第一原発付近

・中間貯蔵施設の工事が進む（住民は戻れない）。

・国道６号の三角屋交差点に「中間貯蔵工事情報センター」があり、工事の趣旨や工事状況を説明している。

・中心部

・大野駅と大川原の新・町役場までの道路のみ通行できる。

・県立大野病院は休止中。

・原発事故からの避難（救出）が遅れたために５０人が亡くなった双葉病院グループは大熊町にあり、大野駅の南１ｋｍにあるが、近づくことはできない。

・大野駅付近の農地で耕作が行われているようである。

・熊川流域

・国道６号以外は通れない。

・大川原

・町役場と災害公営住宅、単身寮などがある。当然だが子供たちは一人もいない。

・商業施設「おおくまポート」はコンビニやクリーニング、レストランなど数店舗が営業を開始している。

・宿泊温泉施設「ほっと大熊」が営業開始。

・交流施設「ｌｉｎｋる大熊」も稼働開始。

・グループホーム・もみのき（社会福祉法人・もみのき会が運営）も稼働しているが、小中学校、保育園、医療施設は無い。

・ＪＲ大野駅～大川原～ＪＲ富岡駅のバスがあり、富岡の郵便局、医療施設、さくらモール（商業施設）へ行くことができる。
・常磐自動車道の東側～ＪＲ常磐線の間に、原発解体や中間貯蔵施設関連の企業が進出している

〇１０年間の視察結果と感想
・復旧を目指しているように見えるが・・現在の居住者の大半は原発関係者。
・子供たちの姿は見られない。
・廃炉工事の期間、中間貯蔵施設がある間は、子供たちは帰還しない。

【富岡町】

津波	浸水高	富岡川の南側で約１０ｍ
	遡上高	富岡川北の断崖部で約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		４７２人（関連死４５０）
人口推移	２０１０年	１５，８６８人
	２０２０年	１２，６６７人
	増減率	－２０％
主要地域	夜ノ森、中心部、富岡駅付近、沿岸部、福島第二原発	

〇被害状況と復旧状況：

・全体

・津波被害は富岡川～福島第二原発の沿岸部２ｋｍ。

・原発事故で全域に避難指示が出た。現在も夜ノ森の一部が帰還困難区域。

・居住者／住民登録は１，６７１／１２，２１７≒１３．７％（２０２１年3月）で帰還は進んでいない。

・死者はほとんどが関連死で南相馬市に次いで多い。

・夜ノ森

・ＪＲ常磐線の復旧とともに夜ノ森駅も再開

・２０２０年3月に夜ノ森駅付近が帰還困難区域から解除されたが、帰還は進んでいない。

・花見（桜）の期間だけ賑わいが戻る。

・夜ノ森の小学校（富岡２小）、中学校（富岡２中）が閉鎖された。

・中心部

・帰還は進んでいない。

・医療機関は双葉医療センター附属病院、・とみおか診療所、とみおか中央医院がある。

・商業施設（さくらモール）ができた。ただし、利用者の大半は原発関連の作業者。

・小中学校の４校が富岡第１中校舎で富岡小中学校として再開、子供園もある

※三春町

・震災後、多くの住民が三春町の仮設住宅に避難した。

・小中学校、幼稚園も（株）曙ブレーキの工場の管理棟に開設したが２０２２年3月に閉鎖予定

・介護施設「舘山荘」も三春町でディサービス活動を行った。

・富岡駅付近

・ＪＲ常磐線の復旧とともに富岡駅も再開。

・国道６号～富岡駅間に災害公営住宅と多数のアパート。大半は原発作業者向け単身者用アパート。

・ＪＲ常磐線と海岸の間には住宅や産業施設等は無い。

・沿岸部・漁港

・富岡漁港は復旧（周囲に住宅は無い）。

・沿岸部の防潮堤、２線堤、新設道路などは過剰投資と思われる（ＪＲ常磐線を１００ｍほど内陸側に移設すれば済むこと）。

・第２原発は廃炉予定。

※常磐道より内陸側に特定廃棄物埋立処分施設（要・調査）ができている。

〇１０年間の視察結果と感想

・夜ノ森では学校や住宅の解体が進んでいる。住民の帰還とは程遠く、桜の時期以外は亡所になると思われる。

・中心部は住宅の解体が進む一方で、原発関連の事務所が増えている。

・防集は富岡川沿いに約５０戸。

・富岡駅や富岡漁港が再開したが、付近に住宅はない。

・住民の帰還は簡単には進まない。

【楢葉町】

津波	浸水高	木戸川の南側で約１０ｍ
	遡上高	断崖部で約３０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		１５３人（関連死１４０）
人口推移	２０１０年	８，０６１人
	２０２０年	６，７９７人
	増減率	－１６％
主要地域	北部、えみふるタウン、前原地区、南部	

〇被害状況と復旧状況：

・全体

・津波被害が大きいのは木戸川下流の南側（前原地区）で、楢葉町の北部（福島第二原発）と南部（Ｊビレッジ）の海岸段丘上は津波被害がない。
※居住者／住民登録は４，１１７／６，７５７≒６０．９％（２０２１年6月）

・北部

・新しい工場（アンフィニ福島工場（太陽光パネル）、ＮＢＳ東日本工場（ガラス製造））などができている（補助金の活用と思われる）。

・農地は工作が行われているようである。

・竜田駅が改装され、駅前も整備された。

・廃炉作業者向けに大規模なアパート群（ユララ竜田）がある。

・楢葉北小、楢葉南小は楢葉中の校舎を使っている。

・えみふるタウン

・大規模な防集と商業施設、医療施設、保育園（既設）、交流施設が完成した。

・前原地区

・津波で内陸１ｋｍまで壊滅的な被害。

・大規模な放射能汚染物の仮置き場となった（既に撤去されている）。

・防潮堤～防潮林～２線堤道路～農地（住宅は無くなり亡所に）。

・南部

・Ｊビレッジが再開、ＪＲ常磐線Ｊビレッジ駅が新設された。

・楢葉南工業団地には廃炉関係研究施設などができた。

・しばらく警察署となっていた「道の駅ならは」が再開した。

〇１０年間の視察結果と感想

・楢葉町で着目してきたのは「えみふるタウン」と天神岬から見た前原地区（木戸川の河口部南側）の２ヵ所である。

・えみふるタウンは元々農地であった所が徐々に整備されてきた。

・天神岬から見た前原地区は、最初は津波被害、次にガレキや放射能汚染物質の仮置き場、そして現在は農地である。

・これからは人口約７千人の継続するまちづくりである。

※福島第一原発に続く廃炉作業

・福島第二だけでなく、日本中で原発の廃炉作業が行われていく。
放射能汚染物の処理の問題が大きくなっていくと思われる。

【広野町】

津波	浸水高	広野駅東側の沿岸で約１０ｍ
	遡上高	断崖部で約２０ｍ
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		５０人（関連死４６）
人口推移	２０１０年	５，４９５人
	２０２０年	４，７２５人
	増減率	－１４％
主要地域	広野火力、広野工業団地、下北迫付近、広野駅付近	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・津波の浸水範囲は常磐線から海側５００ｍ程度で、海岸線も１ｋｍと狭く、直接死も少ない。

・福島第１原発から２０～３０ｋｍにあり、全町民が避難し、半年後に解除された。

※居住者／住民登録は４，２６８／４，７３４≒９０．２％（２０２１年6月）。なお、住民以外の滞在者（１，９２５人）を含めると１３０．８％となる。

・広野駅までのＪＲ常磐線再開は早く２０１１年１０月。

・広野火力（東京電力）

・津波により大きな被害を受けたが、約４ヵ月後に復旧。

・広野火力の裏側（陸側）は大規模なガレキ置き場・処分場となった。

・広野工業団地

・震災後、全企業が操業を停止したが、現在は復活している。

・下北迫付近

・防集の下北迫団地がある

・原発避難を行わなかった高野病院と介護施設（はなぶさ苑）がありその近くには作業者用のアパート群やホテルができた。

・介護施設の光洋愛成園（元は富岡町の常磐自動車道の内陸側にあって、介護施設の原発避難の中継拠点となった）もここに移転してきた。

・広野駅付近

・広野駅東側は複合ビル、医院、高校の寮、アパート群、ホテル（はたごイン広野）ができた

・広野駅西側には町役場があり、その敷地内にイオンができた（広野テラス）。

・広野駅西側には子供園、広野小、広野中に加えてふたば未来学園（中高一貫）ができた。

〇１０年間の視察結果と感想

・原発関係の作業者が多く滞在している。廃炉作業は福島第一に続いて第二原発も。３０年以上は継続する。

・その間に人口５千人弱の継続するまちづくりを行うべきである。

【いわき市】

津波	浸水高	豊間、薄磯で約８ｍ
	遡上高	－
死者（関連死）行方不明者（２０２１年3月）		４７４人（関連死１３８）
人口推移	２０１０年	３４９，１８１人
	２０２０年	３１８，６４３人
	増減率	－９％
主要地域	・久ノ浜、四ツ倉、新舞子、薄磯・豊間、小名浜付近	

〇被害状況と復旧状況

・全体

・いわき市全体から見れば被災地は沿岸部のみ。

・原発避難者を受入れている。

・久ノ浜

・沿岸部の住宅は甚大な被害で、直接死は５０名を超える。

・久ノ浜沿岸部は防潮堤～防潮林～道路～住宅（住宅はまばら）。

・沿岸部に復興商店街「浜風きらら」があるが・・名前からは観光客向けともとれるが厳しい。

・防集は東団地、西部団地、そのほか南側にも。

・ＪＲ久ノ浜駅は浸水していない。

・ＪＲ常磐線の内陸側に小学校、保育所、子供園が集まっている。

・ＪＲ常磐線の海側に医院や歯科がある（村岡歯科医院、須田医院付属久ノ浜医院、あべクリニック（婦人科））、支所や公民館を兼ねる地域防災交流センター「久ノ浜・大久ふれあい館」ができた。

・商店はダイソーがあるがスーパーは無い。

・四ツ倉

・四ツ倉～沼の内では沿岸部の被害が大きく、直接死は約２０名。

・四ツ倉港も津波被害を受け、道の駅も被害を受けたが、早期に再建（２階建てに）復旧した。

・沿岸部の被害は大きいが、ＪＲ四ツ倉駅付近は浸水していない。

・ＪＲ常磐線の内側に県営四ツ倉団地や四ツ倉南団地（市営と思われる）がある。

・新舞子

・防潮林が残っているが、津波は１ｋｍほど侵入し、付近一帯の建物の１階に被害。

・舞子浜病院は１階に津波被害を受けたが、現地で継続している。

・薄磯・豊間

・沿岸部に住宅が密集していて、壊滅的な被害で直接死はこの２地区で２００名を超えると思われる。

・海岸堤防～防災緑地～公園や生業～高台住宅地（防集）。

・市営薄磯団地、市営豊間団地ができた。
・防集の課題は
・時間がかかりすぎて、他へ転出
・災害公営住宅に入居し、戸建てを断念→防集に空き地
・豊間小、豊間中がある（中学校に保育園・学童を併設）。
・いわき震災伝承未来館・・近くに塩屋崎灯台はあるが、震災遺構は無く、訪問者は少ないと思われる。

・小名浜付近（江名～中之作～下神白）
・江名港には防潮堤がなく、多くの住宅、小学校、幼稚園は高台にある。
・中之作の岸浦地区の被害が大きい。
・中之作地区は防潮堤を設置しているが、漁港部が開いており弱点。
・江名中、永崎小は高台にあるが、永崎保育園は海岸に面している。
・いわき海星高校、小名浜高校が統合。
・下神白保育所は津波の被害を受けて廃止された。
・下神白の高台に災害公園住宅（県営は原発避難者用、市営は津波被災者用）がある。

・小名浜
・産業（水産、工業）、医療・介護施設などが充実している。
・臨海部の工業地帯の敷地標高は高く、津波被害を受けていない。
・勿来では防潮堤が造り変えられたが、小名浜に防潮堤はない。

〇１０年間の視察結果と感想
・いわき市の沿岸は北の久ノ浜から南の勿来まで極めて広い。
・中間位置の塩屋岬近くの薄磯、豊間で約２００名が亡くなった。
・南の小名浜には防潮堤がないが、１ｋｍ北の下神白はＴＰ７．２ｍの防潮堤や水門ができている。
・いわき市の人口は３０万人を超える。その中で「沿岸部の復旧」から「未来へ継続するまちづくり」へ遷る時期が来ている。

※豊間・薄磯の復旧について
・豊間・薄磯の後背地にはゴルフコースが２ヵ所あるように、広大な土地がある。塩屋岬を挟む豊間・薄磯は自然公園（震災公園記念公園）とすべきである。そこであれば「いわき震災伝承未来館」の意味がある。